日本ことわざ文化学会　第7回大会

2016年11月19日は、朝からあいにくの雨。大会が開かれる11時ごろにはほとんどやんできたが、明治大学前の通りを行きかう人々は、まだ傘をさしたままだ。

東京・駿河台の明治大学研究棟2階第9会議室で開かれた「日本ことわざ文化研究会」第7回大会。冒頭、**司会の石原仁誌氏**に促されて挨拶に立った**時田昌瑞会長**は「昔から“雨降って地固まる”と云われるが…」と早速の諺で切り出し、「濡れた土を人が踏みしめることによって、乾いた後の固まりかたが強くなる。真摯な議論を経て、堅実な成果を挙げましょう」と結ばれた。

午前の部は総会（11:00-12:00）。議長に**中村富美氏**を選出、同氏の手慣れた進行で議事は円滑に進み、2015年度活動報告と会計報告・監査報告、2016年度活動計画案と予算案を承認した。また、新年度の役員として現役員が全員継続再選されたのに加え、新たに中村富美氏と辻周吾氏が選出された。

総会終了後、昼食・休憩をはさんで、**午後の部（研究発表会ならびにシンポジウム）**の始まりである。

今回の統一テーマは**「旅とことわざ」**。

第1部・研究発表会（13:00-15:00）

今回の研究発表は、２人の女性によって行われた。

司会の安藤友子氏（洗足学園音楽大学「お話しコンチェルトたんぽぽの会」指導者）の紹介で初めに登壇した**中尾 暢見氏**(日本大学文理学部非常勤講師・専門社会調査士)は「**小菅村のことわざからみえる社会変化――社会科学としてのことわざ研究の試み――**」と題して講演された。氏は2015年より山梨県北都留郡小菅村を調査している「ＮＰＯ法人　郷土のことわざネットワーク・ことネット（通称：ＮＰＯことネット)」（理事長は穴田義孝・当学会前会長）のメンバーの中枢として深く関わり、小菅村に伝わる「ことわざ」と呼ぶにふさわしい、生活上の知恵や工夫に関する言い伝えを聴き取り調査、「社会科学としてのことわざ研究」の題材として取り組まれた。小菅村は全国的傾向でもある中小町村の人口減少とそれに伴う高齢者比率上昇の典型的な地区であり、村おこし活動の一環としての若年層取込みの動きもみられるが、人口流出の歯止めとなるまでの展望は立っていない。そのような社会環境の中で、そこに住む人々に今日に至るまで受け継がれ言い伝えられている「ことわざ」として、氏は「100日で口に入るソバ」（収穫までのインタバルが短い、というありがたさ)、「山は一軒分は残しておけ」（そこの木を伐ったら一軒分の家は建つ)、「花を植えずにインゲン植えろ」（観賞用の植物でなく空腹を満たす作物を植えるべし)、「小菅はオンナシ（女の人）でもっている」（男性から女性への敬意と感謝）その他を挙げられたうえで、「急激な産業構造・生活様式の変化により、ことわざや言い伝えも実態にそぐわなくなり忘れられがちになってきている。それらを埋もれ去らせることなく記録として保存する必要性を痛感する」と結論付けられた。

二人目の発表者・**蓮見 順子氏**（ネパール研究家・当学会監査役）の演題は、「**人と暮らしを映し出すネパールのことわざ――ノスタルジーを辿る旅――**」。ご自身の35年に及ぶネパール国との関りを通じて知った諺の数々を、ネパールという国の特性やネパール人の国民性などと関連付けながら解説するとともに、その暮らしぶりや風景・風物・慣習などの珍しい映像を公開された。氏によれば、ネパールに古くから伝わる諺の特徴として①ヒンズー教徒の国である（国民の80%）②農業立国である（国民の70%が農業従事者）③貧困である（国連の定めによる世界貧困国の一つ）…の三つを挙げられ、それぞれの代表例ともいうべき諺を紹介された。「インドラの前で雨の話」（①…インドラは雨を司る神。つまり“釈迦に説法”)、「料理の失敗は一食分、百姓の失敗は一年分」(②…農作業での失敗は一年分の食料を失うこと)、「食べてもダルバート食べなくともダルバート。他の食物は牛肉」（③…ダルバートは質素な食事の典型。牛肉は食することを禁じられている）等々。さらに、一夫多妻制の名残りと思われる「サウターの鍋は大きい」（サウターは複数妻。“隣の芝生は青い”と同義)、「空腹で徳は積めぬ、籠を担いで富は築けぬ」（“衣食足りて礼節を知る”と同義）など、同義もしくは類似義の彼我のことわざ比較により参加者の興味を惹起されたのち、自らが深く関った来日ネパール人の冤罪事件（被疑者を支援して十数年に及ぶ法廷闘争の末、無罪を勝ち取る）に言及、無実の彼が獄中で幾度も口にした「正義は最後には勝つ」のネパールことわざを紹介して結びとされた。

第２部　シンポジウム（15:15-17:15）

[パネリスト講演]

テーマ「旅とことわざ」を受け、4 人のパネリストが 15～20 分ずつの持ち時間を受持って講演された。

１．お伊勢まいりとことわざ――世界に冠たる旅文化の原点―-　小森 英明　氏

トップバッターの小森氏は浄土真宗僧侶で当学会の事務局長。江戸時代中期には年間 100 万人ほどの「お伊勢参り人口」があったというから、なんと当時の人口比でおよそ 20 人に 1 人もが…！時間もかかり（江戸からだと往復 40 日、帰りに寄り道すればざっと 50 日）金もかかる。ある意味、ステータスシンボルでもあった伊勢神宮詣では、世情の安定を背景に、旅の安全を保証する「装置系」（街道、宿場など）と「制度系」（道中手形など）の仕組みが整ったことにより一気に普及したようだ。そして「伊勢御師（いせおんし…今でいうツアーコンダクター）の存在が、庶民をいっそう伊勢神宮へと駆り立てる。信仰心の厚さを逆手に取って家族を説得して旅に出、楽しみの本音は参詣後の物見遊山や遊郭遊び、といった裏話も面白く、数々の伊勢参りに因んだことわざ・準ことわざ（川柳など）が（「何事のおあしを持たず伊勢参り」「伊勢の御師さて銭の無いに盛りに来」「伊勢参宮 大神宮へもちょっと寄り」「往きの精進 帰りに観音ご開帳」…等々）、歌川広重の画像なども交えて紹介・披露された。

２．東海道中膝栗毛を旅してことわざに出逢う　　小貫 和洋　氏

続いて登壇した小貫氏（当学会理事）は、定年退職後に勤務されていた福島県富岡町図書館長時代に東日本大震災に遭遇、その後の避難生活を経て現在は東京に避難中という経歴を持つ。氏の発表は十辺舎一九「東海道中膝栗毛」を深く読み、一般にはあまり知られていない部分の紹介にウェイトをおき、弥次さん喜多さんの出身、馴れそめから説き起こし、故郷の駿州（今の静岡県）から「男同士の駆け落ちのような」夜逃げで江戸に遁走、住みつ着いた神田でもそれぞれにふしだらの限りを尽くし、挙句の果てにむなしい気分になり「おい喜多八、厄払いにお伊勢参りの旅に出ようや」…という顛末を経て（ここで諺「おもひたつ日を吉日」が引用される）珍道中の始まりに至る経緯が語られた。以下、日本橋を起点に、終点の京都三条大橋までの長旅の前半、神奈川～三島～蒲原～島田の宿と渡り継ぎながら、行きずりの客たちとの屈託ない交わりの合間に、多彩な諺（「石亀のじたんだをふむ」「清水の舞台から飛び降りる」「風が吹けば桶屋が儲かる」「親に似ぬ子は鬼子」「身から出た錆」等々）が配されて興味深かった。

３．千里の道もことわざと――My 旅の雑記長より――　藤村 美織　氏

三番手の藤村氏(元日本 DDR 文化協会―DDR は東独）は、大学時代に独文科に学び、1984 年に初訪独。その後東独文化を学ぶ会を立上げ現地の障害者支援にも関わり、それらを軸とする国際交流活動や翻訳活動で世界各国を訪問されている。これまでの 120 回に及ぶ渡航を通じて触れた諺は、氏の観察眼によって、旅客機の機内誌にも多くちりばめられていることが判った。氏は、ドイツの「旅」のバックグラウンドはゲーテの「イタリア紀行」「グリム童話」ミュラーの詩作に象徴されるとしたうえで、旅に因む諺「旅に出れば話す種ができる」「旅が(人を)作る」「遠くまで行く者は遠くまで振返れる」などを紹介、さらに、旅に出て出逢ったことわざとして、原形（元々の諺）から派生させてキャッチフレーズ的に使われている「持っているものが全て（存在することが全て)」「よく飛ぶ人になるには早く学べ（名人になるには早く学べ)」「森に耳あり（壁に耳あり)」…カッコ内は原形…などを、珍しい映像とともに披露された。

４．旅は道行――もじりコトワザ珍道中――　　山口 政信　氏

コーディネーターを兼務する本学会副会長の山口氏は、独特の軽妙な語り口で持論を展開された。氏によれば、いわゆる「ことわざ力」とは、① 短縮に耐えうる（その一部を聞いただけでその全部が想起さる。たとえば「かわいい子には」と聞いただけで「かわいい子には旅をさせよ」が思い浮かぶ、など)。② パロディー化に耐えうる（語呂あわせなどパロディー化しても、すぐ元句が想起される。たとえば「旅は靴擦れ、余は情けない」と聞いてすぐ「旅は道連れ世は情け」が思い浮かぶ、など)。…と説かれ、「ことわざ力とは“ことわざらしさ”に富むこと、すなわち、短縮やパロディー化に耐えうるとは橋脚力や架橋力があるということ、ことわざが生命力を持っているということだ。」と力説された。そのあとも、氏自身の作によるパロディー諺が、キーワード「旅」の基軸から離れそうになりつつも離れず、かつ散弾銃的（？）に連発され、参加者を魅了した。

全パネリストの講演後、その 4 氏が演壇に並び、４者によるディスカッションと云うよりも、会場の参加者から質問を受ける形で進められた。時田会長や森洋子元会長はじめ参加者から全パネリストそれぞれに対して質問が飛び、活発な意見交換となった。

すべてのプログラムの締めくくりとなった懇親会は、場所を変え 18:00 から研究棟 4 階の第 3 会議室で行われた。立食パーティ形式の懇親会には、本日の大会出席者の大半が参加し、和やかにことわざ談義に花を咲かせた。はるばる空路で駆けつけた鹿児島大学の鄭芝淑氏、新理事に選出された京都学園大学の辻周吾新理事らのスピーチ、奥野かるた店会長の奥野伸夫氏らの挨拶などもまじえ懇談の輪が広がり、あっという間の 2 時間が過ぎて行った。

以上（文責：芳川雅美）